玉の枝葉

九

1 5
34
10

門 曾5
雅 32
巻 10

和歌聞書の巻

花は雪九

やまひのころ、ひとくさ、はてしなくおもひ乃、本をおもひ
出る心地して、一ときせよ、野かのをもおもふくはかりやう
ふるさと雪やまるほどおもふ、ふるさと思ひ出るまくふ、

ながめふる雪忘れぬ山ぢ心ぢらくやもの思ふ
雪ゆきにけりえて、後の花はなほ山つゝきもこう
ふ物ゆゑ

今様合

百練抄ふ、兼安四年九月一日、於太上法皇御所法住

寺殿有今様合事撰定堪能輩廿人十五箇夜間奏聞
一番被決雌雄師長資賢寺卿為判者十三日白洞
今様合之次有御遊上皇令歌今様給希代之盛談
也

春日社みがきを廻廊に造らるる事

同書ハ治承二年五月廿日春日社今度修造之時
改瑞垣可造廻廊之由衆徒進奏状依申請被下
畢而社家依有申旨被行御卜之處官奏共不快之
由申之而衆徒申云不可依卜吉凶仍被問諸卿猶
祈請本社可有覆推之由定申之遂改瑞垣造廻廊

とぞ云々官奏ハ奏字ハ寮を誤るべし官ハ祇官
寮を陰陽寮とぞ云々

社乃つらりばる

[illegible]

水無瀬殿造営

同書ハ建保五年正月十日上皇御移徙水無瀬殿
新御所是本御所去年大風洪水之時顛倒流失之
間更點他所被造営也十二日自水無瀬殿還御

新勅撰集ハ事

同書ハ文暦元年十一月九日中納言入道定家卿於前關白家搜賢新勅撰先院御時被奏覧両殿下監頗有用捨事被切弃百首云々又有被入之人云々

みちのくの田ゝゑ云

陸奥乃田植ハ哉人の子をとる哉 弥十郎

八十島ハ山くゝもゆ哉とゆ記大ゆ哉ハ山ゆ哉

のゆ哉上の町ハ一ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

苗ハ中乃當ハ哉ゆ哉ハ何ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

の枝ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

三十三人乃ゆ哉中でハゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉ゆ哉

まふかりけり。金いひもちのおろさよ。金いひもちいできけり。椀
を行具そろへさ。百三具拵へさ。金いひもちいでけりとがおけく
まふちふく。いそやとうめ苅わぶまて。しかをまかふ。そう
曲。鎌倉へのぐるそこうハそうかかく。そうこうかう。男よりてを
ぶかうをバなりれ。ほんわうをかうれ。所の舘を。二階
作りけハ。むかふ。むさ。沢をて。二階づくりけハ。むか。鎌
倉の侍所の別当とは。百ゑかの所のゑ。百ゑかのくりあり
侍所ゑ名所と好るべし。夕ぐ。夕ぐふ。ゑ。ゑをバ。苅田ゑ
ぐゑよめく。そよゑをバおゑをやとや。百ゑ余人。百ゑ余人乃
ゑ中。ぐゑをぐゑゑの聟殿。ゑの神ゑに。ゑ鎌ゑ聟殿。

上ゑ。上ゑをゑゑ。ゑ。ゑをゑゑ。ゑ。ゑをゑゑ。ゑ。

為八條院伊通公申狀帝王養母之儀元始自延喜事也所謂温子九條殿女也貴為皇太后寛平法皇令申下無先例仍不可然之由給然而不可依例令存母儀給之由被仰之女院始自東三條院院号貴於后欤將賤欤之由可被問法家小一條院元東宮也而院号之後可為三宮下之由宣下太上天皇者別也只院号更不可貴於后位事也

裾のながさ

同書云寛喜三年五月廿四日若宮御百日也今日出仕人々裾寸法事内々為頭中宮亮資頼朝臣奉行被仰下大臣八尺大納言七尺中納言六尺参議三位五尺四位已下四尺

ものゝふゝのゝ

新撰字鏡小餉寄食也毛良比波牟と訓ず俗云ものをりゝゝ

ふゝのゝ

ふゝのゝ

かぎゝゝばかりゝゝゝ

大野の石佛

初瀬より伊賀へ名張へゆくあひだに大野寺といふ所に
かゝる大きなる石の佛のうゝ安置したり。兼元三年三月七
日上皇御幸長谷寺并宇多郡内大野石佛にとゞまる。
此うゝ詠し上皇ハ後鳥羽天皇し。

みやこぶ

武能といふ管絃の上手一の人乃作せるよりて時光といふ
もの弟子にたまりゆくうゝして。こゝやうぶ出て。うゝ上げ出たりゆ
うゝ。絃管達りうゝしうゝ。みやうぶ名簿とうゝて。な
づきといふ物し。物うゝ名付ともうゝ。

ゆゝうゝて令といふ用
古俗ふ人のうゝ。ゆゝしゆゝうゝ。坊をゆゝ。立をうゝ。坊
どいふを。中古ゆゝ世ゆゝ。せゆゝるどいひ。記録ぶゝ
ちどゝ。令行給。令立給などゝ。此うゝ乃令といふ
とばいゝ。ゆゝ。ハゝ。ぶゝ。ゆゝ形ふ方柴ナ宮時。上皇。宮の云
ふ。安思布麻之年奈とゝ。ゆゝ。ハゝ。ぶゝ。ゆゝ。ゆゝ。ゆ

ゆゑ法名の書出しといふて是ハ今商人の家
ふつゝの書出しとかとゝ出し名乗べし。
かゝゝせん
今碁うゝ。ゆびきんといふて。碁盤ふおこれらべ。
みせんまてぞゝ作るむと云事。
伎藝ふ方まゝいふ名
同書ふ花笠たゝたの法ゝ。笠結をよゝきゝ。ものゝ
おゝゝ。ゝしゝ。ちき法ゝ。ちしゝ。ゝ。ゝ。ぬき
ゝき抱をゝ。ゝ。ゝ。

かごとゝいふ京地の名

今川貞世が鹿苑院義堂に軍忠厳嶋詣の記ゆゑ前の

法の寺居ゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]かご少てはゝ[illegible]

いとゝり。

桃花坊のゆゑ[illegible]ゆゑ[illegible]

應仁のみだれ[illegible]一條兼良おそれ桃花坊の文庫やきて

世乱くなる。そのゆゑ盗賊ども[illegible]七百餘

合ゆゑ乃ち[illegible]

[illegible]おかべの竹林ゆゑ[illegible]

[illegible]七百餘合ゆゑ書[illegible]

[illegible]三万五千餘[illegible]

玉津嶋の神

おのゝ一ゝ世紀の[illegible]

[illegible]

人の[illegible]中ゆゑ[illegible]

人乃[illegible]

津嶋を衣通姫[illegible]

注ふ引[illegible]

ゆゑ稚日女[illegible]

[illegible]

○[illegible]九

○八

后なるべし。そなたに。まづ掛津玉住吉神社四座ありの中に。第四
に神功皇后なり。一説に。玉津嶋といへり。袖中抄に。故左京
亮被申云。住吉神主國基云。住吉は本三社と。第四社は玉津嶋
明神。即衣通姫と。後に。いとくまなく。伝て和歌を好とのふと
いふなり。かく住吉神と。玉津嶋の説に。第四社を。玉津嶋明
神とといふは。玉津嶋神功皇后なるゆゑに。此説有しし。然
るを即衣通姫とといふは。妄説なりとて。猶考るべし。さて
又玉津嶋明神。和歌の神とせるは。柿本人麻呂の神といふこと
なるべし。うち地名を。若といへば。なり。さて又住吉を。和歌の神
とせるは。もとの社神功皇后なり。若乃浦の神なるゆゑに出

しなるべし。さて玉津嶋を。掛津を。玉出嶋なり。古
書に。伝て掛て。此地を。神功皇后の新羅を伐給ふ時に。如意珠
を海中に投給ふ。その地を珠乃出る地なるべし。神功皇
后の紀。國々に。本坐なる。日本紀に見えて。由なしとかくてその
珠を投給ふ地なるべし。或説に。津
玉住吉小玉出浦あり。神功皇后新羅を伐給ふ時。干珠満珠
を得給ふ。その珠の出る所を。玉出浦といふ。紀に。玉出浦のことを。
説て伝へる。なるべし。紀に。玉の玉出浦神を。後に。住吉ともに
きこえたりて。そこを玉出浦といふなるべし。新撰考に。住

吉社、高倉、社頭祝儀、玉手、高倉、玉出、若宮、玉出、若宮、やはり
ぐる光は未だ世とゝのはず、又或説に、千珠備珠は紀の玉
日前宮に納まるといふ、いづれも珠の名なり、有てかゞ四日前宮
は、名まの濱の宮に、その名みたまは、鳴も日前宮
の摂社なりしゆゑ、珠は鳴より出るなれば、まづ日前
宮に納まるとは、云つゝ、なるべし、又玉は鳴の神は日前宮なり、
いづれも、つゝ、なるべしも、摂社なりしゆゑ、さは、濱とは、なるべし、
なるを、合て考ふるに、玉は鳴の神を、祈ひ、奉る、神功皇后の
宝べくもつゝしといふ、此考へなるを、今は、なるべきつゞき
て出るとは、秀栄といひ、宮の人、たちなれて、みまかるを

ぬるゝ、此妙を、はゝ、ゝ、が、甥、長承、忠睦、といふ、がなせるなり、

いづれ、古今集、旅、紀行、なる、大伯、の、の、の、出、ふ、ゝ、へ、ぢ、ゝ、ゐる
ゝ、ゐ、は、紀、の、出、然、ゆ、ふ、抽、ゝ、ふ、年、妻、弟田、を、ら、海、べ、を、絶、ゝ、
然、地、ゝ、出、ゝ、と、ゐ、ゝ、と、光、ゝ、ゝ、べ、し、此、を、伊、勢、まで、ば、ば、ば、く
碑、づ、ひ、ふ、ゆ、ゝ、碑、ゝ、ふ、ゐ、ゝ、ゝ、べ、ぢ、ゝ、は、ゝ、ゝ、べ、し、今、の、振、ふ、も、
大濱、碑、といふ、ゝ、ゐ、ゝ、ゐ、ゝ、ゐ、ゝ、ゝ、の、繰、ゆ、人、抽、ゝ、ゝ、ゝ

社たる集神祇部に見ゆ。ふるとしみふるまでなる儀のうしろ
いつるあり。なる儀も紀の国名草郡園部村の奥に生ていうを
修弦道の一場にして、名高きあるき形し役小角開基といふ。然せの
神乃、多に苦行つるとよりて、今ふかく高き山に吟儀してあ
るものの名ふりて後うしろ名こと、これは多いつり
ふきしの浦　吹上の浜
日集雑に、嵯峨帝信正、わかつ所ぬきの浦にあるべの
事のふつくるべき世に、紀の国に紀のさふりて、まぐ殿上も
加一かきてとつるとて又右和地後に、右京にこに干ち名こ、亭子のこ
かぶとふこの名ふより、石つきてるみる城ちしなりりと歌よてこ、仲

はに物語の浦にて立信乃殿ありふさくやられを忘づもむ、又
廬主熊野紀に、紀の国の吹上の浜より西に出る月いとおもしろし。
ひとり人つよのあるとて、たちぶくしひつくるあしろ、行きめ
こぐ行方もしら波引つきて、こしべもぬきの浦にあるむ月のうち
のあとふやどかる城信乃ちきりにあるつを見て、月に信くふをあり
又あり所やとふけのあるうしれあるふるべや、うきうれぬけね
の浦に紀の国にて、右の廬主ちふれば、吹上の浜の一名しふき
のとつふあるに、風の砂を吹あつむるよりふてのを集のこと、風の砂を
ふきあつむしとは吹上の浜に西面に風をきて、紀ちに白砂を言
く吹上て、一面ちかぶ吹あつめて山をなす、又ちがふふき

ちらして、ゆきとけ平地となり、或ときはのまゝ、そのうへにあるこ
ゝとこゝろ、こゝろふとうして、峰上のそゝぎ、いはゆる公任集に峰上のそゝ
ぎつゝうゐ、雪のゆをふきこゝろ、ゆきバ、度のうるじくやうしゲ、ゆをう
しぬがはゆ、あかりうるゝ、おなじ歌に、峰上信とハ、風のいとゝ吹て、信
のまきごをふきこゝろ、ゆきこゝろ、為家の、峰上の信
乃、まゆ、ゆきとよみ、ゆきるゆ、ゆ、家ふ、西、家集に、ゆ、ゆのまゆ、ゆ、ゆ
上の山、ゆ、ゆ、ゆ

ぞんぜといふ。聖人のいる所、金峯山より釋迦が嶽まで、十三里。釋
迦が嶽より神山まで、六里半。この間、一里を一ちゃうとし、峯中の間、一里を一ちゃうとし、
きとつひやく、大峯は峯伝ひまべて、七十五ちゃうきといふ。さて伝
り、金峯山を、大峯とんはしらまぢくそハ誤り、金峯山をれいゆけ
て、大峯といふ。かの非仏のわくりとふ載集の間、みちけ
りとも大峯ふまわりいふて、神仏をいふ。さて、
書にしるすなり。

かぐらき山　和泉の国

和泉集釋、紀ふ、花ぐらぐらに紅葉の
月をながめよ。此歌ハ、素戔嗚尊、ぐらぐらに紅粉

河乃説ふ、ぐらぐらで、霞ん、して、やがて、こうりと、ぐるぐるしていづ、ちうハ
ぐるぐる出る、いづくぐる、ぐるぐる、佛法、ぐるぐるして、法華経をぐるぐ
きく、ぐるぐるとまきるふ、内陣、ぐるぐるかくるぐるぐるなんとぐるぐ
かぐらぐらき山、ぐるぐる、粉川ちぢ山、ぐるぐる、風猛山、ぐるぐる、和泉集、今
の本ふ、かぐらぐらぐるぐる、ぐるぐる、粉川ちぢ村を、風市村といふ、風森
といふ。節ふ、風市の森、ぐるぐる、和泉の国、ぐるぐる、大和の、ぐるぐる、大峯ふ、錦
端洞、ぐるぐる、ぐるぐる、ぐるぐる

玉泉南郡松村にて寂静院といふてらに住せるふたり
武蔵の豫州洞乃秋の色はたゞ絶ぜずあはれなる
伽井をほりとゝのへてふかへではたゞ本をうゑて冊葉井となづけたり
ぞ。嘉保元年十月十五日ぞこゝにみまうでゝ。彩川ちの豫記
かたるやう。紅葉の洞ぞ逍遥院殿はまだ武蔵守の時のこゝろ
よみ給へり。はるばるふかへでの色かな。

紫はた名高浦

名高の浦ぞ名高き。昔ハこの里。海士乃入まり。今も
名高ぞと。名方ぞといふ里ぞ。蘆白はたぞ。小の方にある
時ぞ。こゝにて。人〻相伴しるつゐでぞ。一人がいふやう。名高はた里

中ぞ。むかしぞ。北川とぞいふ。ちひさき川のぞ。そこいくぞ。
しきぞ。はるを。紫はた。ぞふるゆで。事ぞ。むかしのつを
ぞ。名ぞハ。ぞ。ぞ。ぞ

那代、ものこと物語さ名をくばりて万葉かむくさんの名言
くつぎをうるハ、うへこの里うりを村崎あぐいして、そこの
るくさるの浦といるふそ所くじうちまどうち川のうちかく人
ばてあまバうくうふそいつひがときをかくうふおせむくあよ
くくるづのあへ。

黒牛浮　蔵白　糸鹿山

是牛浮ハ今ハ是江といひて、あ山の方より、然堅うおるち
ゆるて、是ハ干浮名高くつぎくふわひつくゆりて、三里いづ
ともも町づくりて物うる家ちくくうたつぎ、ふぎくくした里たし。
皆入海のおううふて、あくきよう、是ハあどハ山うもかくうけくる

うくゆる、此ちくうり苦ハ名茅那あり、沖、いまハ海去那くいり。
付紀の書ハ或書ふけ是ハの殘べて、むくいと大きかて、いろ是
き石ハ牛ハうくちくくうがるて、ゆくうり是バうくまて、ゑぬ是那
まくうくあ、いつのくろうかやうくふかふ堅是ゆきて、くしどれ
アうあるを、一ちせ里人どとわあくくちて、ほりかくハさむとせ
くかど、大きふくてづひふえうり出さでやこゆを、今ハこのかく
アまで、里つぎきてうれふくを、民ハ家の地乃下ふ者より、ふ
那くくるア、茅白をはじ那、名ゑハ里をうあまて、番さ数
ふとくくゆけバ、その坂の御ちくふて、ゆぢくうう村といふまて、
そこふ茅ふ五ふくくかて、社ふそめかうとふ五結つかくよ

世とそ称る。九十九所の王子くゝの中より一つ宮。俗ふ熊野の一乃
宮なるべしとあるは。十八町ばかり。藤白の坂をのぼりて。
こもり堂ふきたりの。その宮の西のうらに。俗所芝といふあり
宮ばかりの人。熊野詣幸ばかりの。頼宮はあるべし。形ばかりの
社。きよらかにとそ見るべき。きよらかなる。玉田那
なる。須佐那社の那立。出雲守岩橋時俗ハおのがまゝにあるを。
俗やゝ絵ふもまゝでがてゝ。ぞぞがあるに。一花や
どりしるし。その中ゆきゝふ上のぞやと社所ハ。そのしるし形。
此ぞさの俗社を。千田と以ふ里。山陰にゝゆ世ひて。然
野をよりハ西ゝ方へとりて。玉田川乃川をぞゝゆく

恵し。糸家山を。然ゝ社の坂ふて。玉田那に。小乃藤
に。糸我の里。又糸我王子社といふもぞぞ。玉田川のほとり
に。此山ふもとゝ。ふたつゝ。ぞぞ。ぞぞ。ぞぞ。
せぞりしに。このいとぐゝ里の藤ふゝ中山ふゝ二人おのが
第ふたりふゝ。ぞぞ。ぞぞ。ぞぞ。ぞぞ。ぞぞ。
人ぞぞがのぞぞ。ぞぞ。ぞぞ。ぞぞ。ぞぞ。ぞぞ。

妹背山

背の山を。書紀の孝徳天皇ゝ。畿内の堺を定めゝ
ゝ。南自紀伊兄山以来。ゝて。兄此云制。ゝ訓注を
ゝて。ゝて。芳柴ふハ。の。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。ゝ。

ゆくゆくは此山をあそぶ。雄神山あるも見しり。妹山
といふことは同巻七の歌に有ふ二首と十三の歌に一首と見し。
合せて記るつふ。妹背の山とよるハ紀ぬ七ぬ歌に見ふ見しり。かくて所所
の社中おふ。妹背山とハ紀ぬふ吉野川をへだて。妹の山せの山と
て二つの山あるとこゝいひ。葛神勝地吐懐篇ふハ。妹背山ハ紀の川
をへだて。見山を北ふ妹山を南ふをいひ。紀の歌ぬ或書ふハ。
背山を伊都郡賀勢田庄。背山村の西北ふ行り。妹山を背山村
の二町ばかり南。きの川乃南ぬをふわりといひ。宣長ぬ考へ
思ふふ。見山を。やゝ孝徳紀ふ見し。万葉ぬ歌ふ。
多るを妹山といふを。見山ある。ふつきて。しぐ。すゝきて。いをふ

名ぬて。実ふ結いふ山ぬるふハ。しぐ。ふそハ万葉三の巻
ふかけをまく。ほしき妹の名を。けきの山ぬかきぬいふ。ぬ。又
引のせの山を妹とハよばゞ。ぬ。見の山といふ名ふつきて。妹とい
ふことをとよ名をバ。又妹山といふことをとやうきて。あ乃ふ
ことせる。ぬるべし。さてバ背ぬ山のるハ。ふ。ふよりまぐ。妹
山のるすぬハ。さてよめるうぬ。しぐ。妹とせの山いりせの
山。或ぬ妹の山せの山ぬて。ぬ。見の山ふつきて
の間のあやふ。妹山ともいふ。ぐ。やして。見の山をいをぶ。して。ぐ
妹の山をのとよめるハなり。七ぬ見ふ。ヲ道ふ。ぬ妹山をといへと。
ぐ。一つ。ぬる。ぐ。ふ。ぬ名あるふ。ふりてのことぬるへし。又七の

是ハ世の山ゝ[illegible]ぶむる妹の山と少るせやもこうち橋ゝ
そゝいふ[illegible]兄山をこゆる時ハ谷川なゞふかわそめ形を
こせる所とこゝ[illegible]ゝ[illegible]ふゝべる山をかゝふ妹山としてかくハ
ようる形べし[illegible]の紀路ふこゝといつる[illegible]ハ二上山も妹ゝそなわ
山とゝよ[illegible]ハ二上山ゝ[illegible]ふ妹といふがなるふそなゝ[illegible]
[illegible]二つあるふよわそ[illegible]きとさハよみつる形とバきの国なるも
兄の山といふ名ふつきてさとしなれ妹山といふ山
[illegible]ハ今かいつるまで兄山ハ[illegible]ふ
[illegible]ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]省山村ゝいふ[illegible]ゝ[illegible]を妹山ハ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
ら[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ

ひとつゝぎき山ハ一、此山ハ川瀬の中ふかくとバ瀬の山と、妹背山
ふあ〜ばといふ、紀ヒバそのてら里人あども、此川中ゝ形をせの山
といふゆや、ちまど川中形るハさゝふ畿内の堺あどふせゝ所べき
山ハあ〜ば又万葉のあどもふあるさゝ所ども、元の山ハ背山村の西
北ある山なるゝ、ちる是ハ紀見ゐがいるも、ゐがゝとし、紀ハ行ヒこゝゝ
そのゝもゝかの川中形るを、妹山といひゝゝむゝハ、妹山といふ
べき山ちゝあどハいふまゝ〜、又ことハ妹山よハ行〜ば、あども必ずいふ
べきふ、ちゝゝいをざるを、ゐへバゝを妹山といふゝなりわゝゝこと
ゐゝを、ゝ成ゐハ、妹山とハこれをいてゝ、ゆゆハ行〜ゝ海
ぎゝゝりゝ、がくのゝ妹山乃ゆゝ〜ゝきハ、ゆゝ〜ゝ寄ふ紀いる山ゝ

なゝきゝゆゝふるべゝ、又ちゝ紀てゝ行ゝ行ゝきの玉人のゝゝ古今
集の流ヒてハの哥、云ゝ行ゝハ、ゝ〜ゝ〜ゝ瀬の中ふ落ゝとあり、
強ゝゝ集、延ゝ清ゝふ、未ゝゆえぬゝ〜世の川乃ゝ紀ゝゝ
いゝ世の山の中紀ゆゝゝ、玉茶集ふ、小世ゝ、中ふゆゝ〜ゝ
世の川ゝゝ、円柴ゝ、いゝ世山ゝ、こゝ行ゝ行ゝふふふ山
紀の玉ふゝ行ゝ、古世ふあるゝ、決定ゝ、万葉ふ紀の玉と
ゝゝゝ紀ゝゝ、ゝ紀ハ名ゝの川中形る瀬の山を、まゝ〜ゝ、誤ゝ
ゝとゝひかの貝ゝなゝ、古世形る紀ゝゝ、ゝいるハ、みゐ後
の玉ふのゝ紀ゝ、ゝ、万柴をゝ〜ゝ、ゝ〜ゝ、ゝ〜ゝ、万柴のおゝ
き紀の玉形るゝ、ハ行の紀ひも形ゝ、今も古世に、ゝれゝゝわ

永き古を集めて後ふかつまでの山を、そなぐ
きこゝろものし、そゝと〳〵古々集なるなぐさてハのあいうめ、第
七の、せの山うこゆぐふむうへるこ、うち後ろ寸又日をうり、紀
の川のべの柴と青れ山、あどつるあふらうて、柴背の山乃中ふ為
るとハ山ひ、よ〳〵やと言ねん料ふ紀の川を国ど川あるバ古せの
川ととよゝを為きるあし、又あふ、うの川をいひおつこゝも
つるかゝ、云伯あるハその川を歌ゝも唱へ侍へしるなるへ〳〵ゝ見て云
ふ名取（ナドコロ）をよ為ゝこゝ、そのそゝ後ふいゝうて、こゝるゝ乃紙よめる意
てゝ、後せのといへども、よりゞゝろゝ見べきハあるこゝ、ゝゝ、この云
為どふゝあるいゝ、へのも、ゝで為るゝ、ゝふあるゝ、ゝうて、あ

やふ〳〵ゝゝゝ、ゝゝ、ハ、ゝゝ名ゝ、ゝの考へ、の侍（ラム）ふハ為
ゝこゝ、ゝ、ゝ為ゝ為ゝこ、いりせ、ふのゝ為つゝて、ゝるハ、ゝゝ、かゝぬゝゝ、ゝ、
ゝ為ゝ古ゝ為ふのゝ為ゝて、ゝるハ、ゝゝ、かゝぬゝゝ、ゝ、
又ゝ為、法古ゝ為ふ、延ふの為ゝ、ゝゝのゝゝる為、ゝ、柴ふ、ゝ、つの
と、ゝる為ゝ為ゝ、ゝ、ゝ、後乃ゝ為ふ、ゝ、ふその為ゝ為ふ為
ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ古ゝ為ふ為ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
ふゝのゝ、ゝゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
為ハ為為ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
紀の玉ゝ名ゝ、為ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、ゝ、
侍乳（ニウチ）山ゝ、大和玉の堺ゝ、紀の玉伊都郡ゝ角田（スミダ）川ハ、侍乳川

のこ[illegible]べし。此川みなもとハ葛城山のうちより出て北隅田
庄を流れてきの川ふかつるし。紀の国ハ和泉国よりきの国の
名高[illegible]ゆゑ。雄山ふかきて南の地ハ[illegible]山に村かちり。神
ヤふかふ雄山の国なりとかり。白石国といつるも此国なりと[illegible]べし。
名草山ハ紀三井寺なり山し。餘等院ハ海士郡賀田浦乃南ハ
方ふ田倉崎といふ所あり。是ハ室人のいひ伝へなりとて。吹上浜
[illegible]ハ西南ハ室浦の北し。雄水門ハ今若山の内ふ湊と
いふ所ふ小野町といふ。是て蛭子社あり。そこふ雄之芝といふ
あり五俵余ハ覆まゝ。弥しといつる小野町といふも。此
雄の町なりといへり。扨蛭子社より吹上社といふをも並べ案ま

是。或説ハ吹上社ハ室戸村の矢のあしともいつる。雑賀浦ハ
海士郡ふて。雑賀庄なりて。是き所なりと中ふ室浦乃西の方ふ。
雑賀湾といふ是ハ[illegible]雑賀浦なるべし。浦の湾
八町郡湾中ハ椒村の八町ばかり海中ふ地の湾といふ是ハ東西ハ
町あり。南ハ八町ばかりの時し。此湾の三所ばかり西ふ又湾ありて。
仲の湾といふ。東西五町ふ南北ハ六町ばかりあり。此二つの湾を浦
のちかの湾といふ。小為手村ふ。玉田郡ふ保田庄ふ推手村といふ
あり。こゝ[illegible]村を伊都郡乃堺ふて。山のあくし。白崎ハ日高
郡。衣奈庄ふ衣奈浦の東南ハ方ふ。衣奈八幡といふあり。是社の縁
起ハ。白崎といふ所ふ[illegible]。三穂の岩屋ハ日郡三尾村の内ふ町

だゝり東面の海べゝ五里岩谷村中小石の親者の像あり。然れ共
のち日高川堤谷浦の行くゝ西の海べ小一里ばかりのもき松
原にて和田松原といふ。此岩谷ハその西の隅し。野路阿胡根浦ハ
同郡堤谷浦の面小野路里にあり。その海べをあゝ孫の浦といひて
貝ゝ多くよりて集まる所也。切目ハ同郡然れそこの海べ也。切
目坂切目浦切目村あり。小々村より一里ばかり東小し。村の小小切目
と云ふ所也。磐代々同郡也。切目川あり。次小磐代
あり。西岩代東岩代とて村名。岩代あり社。海べよりゝ里濱ハ
岩代の面の意なり。南ハまでの行ひと一里ばかりあり。
いふむかし元弘元年七月音大地震ふて。きの山ゝ里の濱

ちゝ町ばかりくゝ。ちゝ海ち陸ちなりゝ。右西記ふとい
をり。三名郡ハ岩代の面也。三名郡村みなべ浦あり。その十町
ばかり海中小路あり。之を廉路也。さて三名郡の面小堺浦
といふ有て郡堺也。そこハ日高郡とあらたさん。年
貴郡也。磯間浦ハ田辺の王宿村の面。神子濱つゞき小あり。神
路ゝ。その一里ばかり海中小行りてかゝまとといふ。白良濱ゝ
陽路鉱山ゝ。俗ゝ行ひぶ小ふて。里人ハ白濱といふ。此濱
のゝ砂。きゝ見ハ。色ゝ。神宮山ハ。郡高ゝ二町ばかり
東面一ちよハ西面小ふ。社の説小。天照大神ゝ。倉下ゝ。二神と祭
といふ。石の階を。六百ばかりのぼりて。上小堂ふて。地蔵の像を

置賀(オキカ)といふ。そこに神倉権現といふ。まつる社ハ彩しの
のこる倉下命の祢釵を祀るゆゑ地(トコロ)なりとぞ。熊野村を
経て云ふ上熊野中熊野下熊野とて三村あり。三輪が崎ハ彩
云ふ那智へゆくそこに海べに対ふ一里半ばかりなるとて
きよ元和元佐野ハ佐野村といふとて三輪(ミワ)湾のつきし佐
野浜村七八町ばかり。玉の浦ハ那智山の下なる粉白浦
といふそこよりて十町ばかり西南に当る。離小湾(ハナレコジマ)といふハ玉の浦
の南の海中にちらばりたる岩石なるべし。ゆゑに名ハ
湾なり。熊野佐野ハ那智山の下湾なるゆゑ海べのさ
き大きなる地といふそのこなる上熊野村といふあるに海中へ岩つき出

るを崎といふ。塩の佐野浦といふ。三前(ミサキ)祢社あり。
少彦名命祭る。什麻の海辺のかり洲(ホ)なり洲(シホ)なり。年毎
に寄て片洲(カタシホ)に流れ寄る。海の備平にゆゑびいくばく流
るるを見ハ海を渡る船人のいくばくかなるを知らず。有馬村ハ新宮よ
り北の方へ伊勢の方へ三里ばかりなり。また本といふ所の古毋ハ
かり西ふかりなる産田祢社。又花の窟あり。里人祀りて大般
若の窟といふ什窟の山なるを古ハ日本国周(メグリ)三町ばかりなる什窟
なる伊邪那美尊葬奉りる所といふを又或説にハいざ那美
尊を葬奉りる所なる産田祢社ハ花窟ハ火祢(ヒネ)なるもいつ
楯(タテ)が崎ハ本宮に二木浦といふ。一里ばかり海中より

ちかむ〻ハけ所伊勢と紀の国の堺なり〻と宣へいとうり。
錦の浦を書給ふ所村の一里ばかり南に此地むかしハ志摩国
なりしを上代後号浦なりと云ハ皆むかしの歌にそなへ
ひきの浦を始る所名ゞてろぐとしくして万葉集にハ妹か
おかゝ見るを学ぶ人を。いづものゝ歌にうりかとぶふえを
ぬ所〻ハ多うる沖此国にハかくもかくて。みる人よりをもるを
ぶ。又さらぬ也。出ぶるしかを。こゝ〻ゝるがえをゝ〻ゝてが〻て。
その人ゝを学ゝおきつる中ふ〻ゝしゝ所なるなふ世の男をバ。
こゝ所ゝ〻ゝて。さゝもかつぬべくおぶめらかきう沖そをゝ地と
えわいぶ。ゝるきるほどの此ハ所ゝ〻ゝふきの国ゝ花集の

やうふぶなりぬる。所ゝ武ゝのゝ所社ゝ所ゝるを
ゝをゝ〻ゝ〻ゝ〻

ざわしく物の道、聖人といふものをもたらしそのふやうを学び
道のひめてく
いづきはきふもそのたゝ事にて学ぶべくもとさぞ学べくく
きるのあわしく陸てくふきそたゝ事物くばはり学ぶ高くてそ
世あわしくに後あきわふ立くしてしぬやさくく伝へざるもばせづく物
つて猪やきに孔きぞぞかしくそもみぐわふ学べくしぬきばそそ
かろぐく学べくいふきるも一きくわはきそるとのるやうきれ
ぐもしるるひかるぐくしくたるくはわきても物千学ぶ学べろ
するてそはよにも高くきばおのづくく学べくはわるぐかしいく
ふあもくくれもきてもをぐくかきそ物くむきよれてそふ

あくびまして猪もきむそ物のいふひうかくむきをぐちか
き学ぶきくに秘伝口決ぐどいふるきぐおくくは道をおもく
きくいあきくぐそのくふてまてはくくきるきておのをむ
そわの物ふして学ぶはそうく学べくきるきくはきくくはきくん又
そをよわもききうてきくとるきんちるぐおわるきくぬぐひも
きるくはきそるおき伎藝はきを物どくはきてもかくてきをかうめ
べくきどぐそうくくくえそぐくくれ道をくはきるてきをべくくもかくぐ

道

道は高伊産巣日神産巣日伊祖神の産霊によりて伊
邪那岐伊邪那美二柱の神はきぐきを物ひ天照大伊神の受

行をせねふ道をまバ、必ず諸の國〻・天地の百に有る孫〻ゆきて
あべきさしらぬ人のおのが見とゝ〻ゆ家の内〻さべき道ふ
をつゝび。

紫神がゆ御ひきるやゝ

旅の住をむつゝきるざゆていまゝゝゆ御ひざゆふよりて、こも
いまゝひもいゝゝゆぐふて多きを、紫神ハ家をうゝて、上をふ
て、よゝくをつゝゝをいてゝことゆ御ぢよゝくゝをりて、ゆしやゝゝ、
かるふをりゝゝぐゝゝき解ざゆ御ゆすぐ見ハいふぐやゝしゆと
へで遍照信正の方ゆ御ほふ、をとよりの風をゝをとふう
きゝる御をまバ久ゝゝゆゝをづべき方ゆ御ふをうゝざるふよりて、をバ

しゝいつゝ紙よゝくかをつゝ、ゝいゝるゝゆびひをべゝかのゝろ多ぞの
あふよゝゆぬゝゆゝんゝハまるゝゆ御ゝるものふいちゝゆ御ゝるゝをか
くまゝるふこまゝふゝゆ御をゝゝゝきるゝをゝびゝを見ゝゆふ佛ふゝの
注釈ゝどゝをゝえ物をゝゝるゝゆ世御ゆゝわゝをべゝほゝをゆゝの注文
をいふ御をゝ添ゝゝせゝゝをゝて、えゝいをゝをゝゝゝゝをくゝちへ
て、ゝちゝゝゝえゝをる物ぞゝゝ。

ゝゝゝゝの古人、昔世のゝいゝゝゝゝゝゝゝ

方ゝゝゝゝゝゝも夏殿ゝゝゝゝゝゝゝ

一、一ッ二ッいそぐ禹ハ顓頊ガ孫、舜ハ顓頊ガ七世の孫ニシテいるか、
用ドウカフて位をゆづりうるゝハいふ又伊尹ハ成湯ガ時の人な
ゆゑ、そのゆゑ伊陟といひしハ湯ガ五世の孫の太戊といひし
王の相し、その五世ゆゝの孫いとゝくにをいでなゝめきんまゝ
周の先祖の后稷ハ堯舜ガ時乃人といつゝ、文王ハ后稷ガ十四世
の孫し、そのゆゑ身ハ敬ふを尊ぶ世ゆゑいとでゆゝ
きゝうきをし、ゆゝ世ゆゑ人といへゝ、さがうみの命ちかう
しとハ、ゆゝぬものをやゝ、ゆゝ、むゝゆゝ人も、やゝいふにと
ふいうきかし。

成湯ガ誓ハ言又周の武王

りゆゝの殷の湯王、夏ハ桀王をうゝうもゝうして、民ふ誓ひと
乱詞り、予其大理女云ゝ、女不従誓言予則孥僇女。
といつるをゝ、ゝもゝうゝぬ者あゝりしをなつきをもおゝ、もして、
ゝひゝ已ふゝうゝ、ゝめゝ、ゝ実ふ民のむふいふ、ゝく桀
をふゝて、湯を思ひゝうんゝゝ誓ハ言ハ、ゝゝ、ゝもおゝ
ゝ又周の武王もゝうふ、ゝ民乃苦ゝ、ゝをくゝもゝゝふ紂をゝう
ちゝうゝゝ、ゝゝ、ゝ箕子ハゝを立てゝ、王ふゝゝべきゝ、ゝふゝ、ゝ
ゝゝ、ゝのゝゝゝをゝゝゝて、王ふゝゝゝいふゝゝて箕子ふゝ、朝
鮮をゝゝゝへゝいゝ、後ふ已ガ愁を、ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ国ふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

そむめらわ定まれる主をなくして君臣の義もまぐれるゆふ
して君をほろぼして国をうばふも多く天のうらみをうる
ぐるふ坊訓いひまして宮人をうばひきるゞふ人きし又さるあ
しれ人ども王室人をうてまたそやをゞをうきし

當の字のつくりさまゝ又此を今はといふて

當字うたりひやう皇国にてハ多く此といふを又
今といふを用ひうゝ今音も紀に當国當不當時當年なゞの
ゝゞひうゝ此を此所今時今年といふを義ふハうゝ
ゝゞ當字ハ其といふふあるうて當を當不ゞハ字はゝをてゝ
ゝ西ゝ家といふて當時當年ゞハゝはゝ年といふをしゝるゝ

ゝふ日本紀ハそのゝ訓ゝゝはゝゝしりゝゝゝゝハ此と
いひ今といふを小本州本郡本年本月ゞいふ本字のつくひ
ゞゝ當某といふあるゝ仮ゝもゝゝゝて本某
といふゝゝいゝ古き書ふゝゝ中ゝゝはゝゝゝゝ又
此寺といふゝ漢やうふ本寺ゝゝハゝゝゝ寺未寺はゝ
寺ふまゞゝゝゝゝゝゝゝゝ漢文ゝも當寺ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ又佛ゝゝゝゝゝゝゝゝ

そもく〳〵うち今の字ハといふてひを引ふり〻はあいといひてそ
ふかそをふ引るあはこふまかふをうあどはあをバそをゐむさ
をゐはどふハ今ほはるあうをとをバ結いもむ〻ふ〻きをふるあ
らをなん。

はをふ異なる字をはちをそ

字をはち言の。むう〻をいひあをしるふ考のをとあを形を矣〻。
周礼を西らい檀弓沈ゞんゞう。淮南子を点ゐんゞ。玉篇をゞ
くへん。鄭玄をちやうぎん。孔穎達をゝいこうゞうとゝふゞ
ひを。呉をはをバゝをとなゝ。越王句踐を点ゝうゝうゝせんゝよ
むをゝゞ引つをていふゝ子昂ををかうゝいふを。扇子銀を鑵

子をゞはちゐゞひふて。こをゝをゝ唐音形るべゝ。子字今はを唐音に
てハはちうと呼ををゞをといふ。宋元をどの了後乃をふゞ行を
むゝ。又天子のおへ行幸の時をゝゞ〻ゝ。おを〻〻海を不を行在取
といふをあんざいをよとよむハ。はをゝ別ふ行んの字ふをるうハ
あゝゞ。行燈行脚をゞいふあんとはゞて。こをゝもむゝはち
唐をなるべゝ。今はを唐をハ平声の時も去声乃時もいんといふ。
又もうゝうちゐの。明の代の明をみんと呼を。唐をし今の代の
清ををんといふを。唐をの訛し清字はを唐をハはいんと呼を。
又明の代のそゞをゝ。鄭成功といひゝ人を國姓爺と称ふこの
姓字はせんといふも。唐をふをいんといふを訛をし。をとこ乃

國姓爺といふ孫々國姓とハ當時の王の姓をいひて此人明の姓
を賜ハるよりし父爺ハ某老某丈などいひて老丈のことなれ
ども孫しらきに代りて王子なるゆゑ國姓といふなり
ばいぞふいへり

いかゞ云ふわる人のこゝふ諡をいふ誤

古今記ふ村上孝口帝義光が大諡宮ふいつもうかりなりて
こゝろ死なむと言ふ時の詞なり我ら後醍醐天皇ハ井二の皇子
なりといふなり古時ハ後醍醐のみをハいまゞ言ふなりしくしは
ど称るふいまゞ後の代諡をバ中古ハ人の知ることしばしば
ふかしぶとふなりいふ史記の田齊世家といふこゝふ小齊ふの人

の寄ふ姫手采芑帰手田成子どうとつるよりあるなり成子と
いふ田常といふ人の諡なることもこゝふ在乎ふ
のおくし左傳ふ世ふ人のつゞ在乎ふ
やうなるゆゑ

某公某郷といふ

公郷といふ左傳ふ公をつけ三位ふ卿といふ先ふ
きもバ公郷ふ人の名をいふ大臣なるをバ某公とし納言
より上位ふをバ某郷といふつゞけ法もゞと某公といふ
へ云ふハ必ずしかりてなむ大臣をバ云べて右大臣左大臣
云ふ堂上ふ堂一家白ハ堂上ふ名をいとでハえあ
らぬゆゑ良房文徳忠平ふたれゞ云ふ又某郷と

つかうまつる。源氏物語・栄花物語などは、一つも見ず。行平中納
言・道雅三位などいふ。ものがたりは、基づくといふ。後のものがたりは、
さかはいうらびたるやうなり。万葉集は、式部卿敦実宇合卿中納言
安倍・廣庭・つねなどの、新拾遺集などのやうにいふ。ふ
るきことばは、みな、ものがたりは、文などは、さらなり。
ゆゑ・ことばは、思ふ事、定まれる家産・ねどころ・定家中
納言・家隆・二位などいふ。ふるきことばは、かく名付
ける。又、位をたまはりたる人、かく文字は、かりて
なり。しかれども、基づくとのことばは、ものがたりの文の
例なり。心のつかるるやうにやうべきかなり。やうのつくるやうも。

第一へのうきよ草の例をよくかんがへ、ものがたりのふるさとをたづ
ねべきなり。

石見国那賀郡の出雲

石見国邑知郡出雲村といふ。大きなる出雲なり。里人云
づ出雲といふ。出雲は後のさとびより近きさとなり。濱田より
北里ばかりと東の方、山陰道にて、濱田の主の領地なり。此
出雲郡、さて世五百戸もある大出雲と、又その近きほとりなる大きな
るちひさき出雲郡とあり。いにしへ大宅手建ノ命名二神の、
ものいはせし出雲と、ひとりの里人語りいふ。そのいにしへ
ものがたりの出雲此方なりしか中ごろ、その命の別の社をして

て、ある、志は格現とゝけたるぞ、此り、かの西の小藤、伊野がもと
ゝ、ゝ、ゝぞふかの里人、ゝ、多て、ゝ、ゝくるひきゝ、ゝ、ゝしとて、ゝひお
らせるわり、芳樂集、この方、多方、志都の石室ハ、高と形、ゝむう
ゝ、ゝ、ゝ、

神と申し、位階従五位上。伊奈久比神社ハ伊奈々伊奈村ニあり。位階
従五位上。行相神社ハ佐護伊奈二郷の堺ニあり。位階従五位上。
和多都美御子神社ハ仁位々仁位村ニあり。位階正五位上。今ハ天神と
申し。胡録神社ハ伊奈々琴村ニあり。位階従四位下。今ハ琴崎社
と申す。胡録彦子神社ハ同々同村ニあり。位階従四位下。今ハ郷崎
社と申し。嶋大國魂彦子神社ハ佐護々佐須奈村ニあり。位階正
五位下。大嶋神社ハ仁位郷仁位村ニあり。位階従五位下。今ハ和多都美
神社と申す。波良波神社ハ同々同村ニあり。位階従五位下。今ハ軍
殿と申し。上件十六社ハ上縣郡ニ在る。三根佐護伊奈ハ
の郷ニ在る。和名抄ニハ下縣郡ニあり。又仁位々ハ和名抄ニハ見ざれ

ども在ハ上縣郡ニあり。しかるニ今ハ下縣郡ニ在り。高御魂
神社ハ豆酘郷豆酘村ニあり。位階従四位上。銀山上神社ハ佐須
々久根村ニ在り。位階従四位下。今ハ五所大明神と申し。雷命神
社ハ同々阿連村ニあり。位階従五位下。今ハ八龍殿と申す。和多都
美神社ハ國府ニあり。位階正四位上。今ハ八幡宮と申し。多久頭
魂神社ハ豆酘々豆酘村ニあり。位階従四位上。延喜式ニ
太祝詞神社ハ與良々加志村ニあり。位階従四位上。今ハ加志大明神
と申し。阿麻氐留神社ハ同々小船越村ニあり。位階従五位下。今ハ
照日權現と申し。住吉神社ハ同々鶏知村ニ在り。位階従四位上
和多都美神社ハ住吉と同社ニ。位階従五位上。平神社ハ國府ハ

幡言の西の側あり。神階正四位上。今は脇宮とす。敷嶋神社は、
興良々加志村に坐す。神階從五位上。都々智神社は、佐須々久根村
にあり。神階從五位下。今は矢立神山と申す。銀山神社は、日々樫
根村にあり。神階從五位下。今は六所大明神とす。上件十三
社は下縣郡に。後の小豆酸々和名抄に上縣郡に佐須々興良
郷は、同抄に見えざれども、賀志々鷄知々は、文亀の上縣
郡に見えたり。後の式に和名抄に郡の上下に付いたるは、和名
抄の比なり。初めは十六社は、下縣。後の十三社は、上縣郡なり。
ぞ。此の外に、ぞ。さかとりの社。むさて。右の神社ぞ
と。此中に、多久、頭多麻、神社。式に下縣多久頭魂

神社。式には、諸字脱し。名のうちに、豆酸の酸字。えづしと見えば、も
酸を誤れるか。されども、ずるらとぞ。ひしに、字書。又は酸、字音頭し
は郷を。新釋。五の海東諸國紀といふ物には、豆酸郡と書せり。さ
て此対馬の式社なるも、小藤。伊野が、彼方に、ひたもる人の
あるが、体に、ふやに、に。おつをもちて。そ。ふも。出佐々
えとに。おとせ。ちし。沢。る。せる。こ。そ。と。く。式社。國のやむを。ぬき
神。ち。形。ふ。ひ。づ。を。ぬ。出。も。今。は。号。ぬ。ぬ。ぬ

[illegible]嶋などハ、[illegible]海中に[illegible]ハ[illegible]
みぐるもさらに[illegible]
のさまハ、[illegible]
[illegible]

、にかくさぬ[illegible]
今ハ世の[illegible]
[illegible]
[illegible]

梅[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

能字ハ音態するべきふのゝことゝなりてよと張書るふや。

あやまり従文

今ハ云ふ。あや書と従文といふ物。ひゝハ島状といふきほど書に過ぎ状ゝとしゝるわ字治拾遺物語ふがゝるわ。あゝとも云り。

書紀の本書一書ハ事

書紀神代巻の所々ふ。同じ事ハ異なるを。別ふ一書曰ゝとて。いくつも挙らゝるハ。その久き古の書どもゝ有しを。ことゝもかゝとも。されどゝふて。そハ強ゆゝしき代。本書ハしゝとゝふ一つの古書ふらしてよゝ従ゝるハ。ぎゝして。うゝゝゝゲ中ふ。ゝゝゝゝふてゝも。漢意ふちかゝ。そゝゝわ

ゝぎわを。撰者ハ心もて。ことかゝを定といひ。そゝ行つ定てかき。後ゝきゝ後ゝゝゝもゝゝてゝ。そゝめを行ゝゝゝ。ゝゝ事ゝゝ。

あゝ。ゝゝ。天照大御神の大御名。ゝゝ名ふハ。ゝゝ號大日霎貴ゝとのゝゝて。亦名天照大神ゝゝ。ゝゝふ次乃尼ゝゝハ天照大神ゝ記ゝゝ。ゝゝ初ゝ後ゝ遠ひゝゝ。天照大御神ゝ中ゝゝ。一書曰天照大神ゝ。ゝゝ名ふて本書ふ。ゝゝ一書曰天照大神ゝ。ゝゝ記ゝれゝゝ。異なる伝へゝゝゝ。

あゝ。ゝゝふ。ゝゝ。ゝゝ。ゝゝ名をゝゝ挙ゝゝゝハ。これゝゝ大日霎貴ゝゝ。ゝゝふ。ゝゝを。ゝゝ。天照大神ゝ中ゝ。ゝゝ。ゝゝ。ゝ

光彩亞レ日ニ云々とあるまた一書ふ[に]ハ名のみをしふ尊字を
書れ[た]るばかり。ふ[に]ハ名ふ[に]ハ神ふまし[ま]ハ生月神とのを
わかてハ名のちがきハいかゝぞや。又高皇産巣日神ハ世のなかを
ふ成坐て最もとき天神ふまし[ま]て名ふ尊字をかき神
武天皇もハみづ[か]ら祭祀齋し給ひて道臣命を祭主として給ふ
ふのゝそのなかに名をバ紀ふ[に]て書ふゝ下巻ふ[に]ハてをしめ
て。ふ[に]ふ[に]ハ名を書出さゝて。皇祖とも記して。皇孫命ハ葦原
中國ふ[に]天降しなゝと給ふるもみな此神の詔命し給ふハ[に]ハ
又初と後と遠へるがごとし。此ふハ縣居大人も心ハなをふいをれと

ふ。おのゝふ他神ふ[に]ハのゝ。ふ[に]ふ[に]ハ。ゆゝ[に]ふ。なゝ[に]ふ。ふ[に]ふ
出べき神ふハまし[ま]ハ。成出坐し始を。ふ[に]ふ[に]ふ。ふ[に]ふ
べきゝなるを。たゝとゝ[に]ふのゝとゝびのゝすゝと。撰者のかなて。取
と捨もゝ[に]ふ。ふ[に]ふ。ふ書ハ中ふ[に]ふゝのなるもの[に]ふ[に]ふ。
八百萬神といふを出紀ふ八十萬神と記さゝ[に]ふ
ふ後ふ[に]ふ神ふ[に]ふ。此ふ[に]ていふふ古事記をふ[に]ふめて。その
かゝ[に]ふ方き書ふとふもみな八百萬神といふるゝつふ[に]ふ。ふ
書紀ふ[に]ふのゝハいつふふ。ふ[に]ふ[に]ふ。ふ[に]ふ[に]ふ。ふ[に]ふ[に]ふ
ふ[に]ふ。ふ[に]ふ[に]ハふてふ。ふ[に]ふ。ふ[に]ふ。ふ[に]ふ。ふ[に]ふ
ふ。ふ[に]ふ。神の出名紀日高とやんをも。彼紀ふハ[に]ふかゝ。彦とも

永さもてる八當代の天皇ゆ伊名河さきくさくりあげき
を此八十影神ハいつ形るよりあらはるひいまゞ思ひえぞさてやう
のるべびも神の代々の文字形どゝ後の号は書ぞとハおろく
書紀ゆのこよりをもあくに此称をゝ出紀ゝよりこゝ今の号ゆ
いるまでゝ八百影神そのこいひるへるハ老つし。

人名を文字ゆいるる

人の名を世ゆ文字ゆ書ゆて呼るへるゝ。ゆるくハ時平大臣多
田満仲伊予守頼光安倍晴明などゆきたりやゝ後ゝハ後成て
定家て家隆て晴長ゆなどゝもてこゝとゆのこいひるへ人ゝ
琵琶ゆしの宗教物語をかるゆきくゆつゆふきまゝわるゝ。

ゆくゝゆ人のゆるゝゆいゆくハもゝてゝゆ抱を形るハ書るゝ
ゆゝゆの中ゆゝかりなりしゝゆるゝ。

孩恒姫ゝる

さゝゆ熟乃下ゆゆ老ゆいるゝ。ゆゝきのゆゝ形ゆ像ゝいふ姫のゝゆ。肥
後ゆ人ゝゝゆゝゆゝゆ作りるハゆの恵田郡白川のゝゝり。九品山蓮
華寺ゝいるるゆの姫の墓ゝいゆるて古き名詩ゆゝゆ。きゝゝ老
ゆゆゝハなゝ。ゆゆ像ゝいふ物ハ内郡ゆ岩殿山ゝいふゆ。観音ゝゝ
ゝるゝ岩屋ゆゆゝゆゝゆ。ゆゝゆゝゆゝゆゝゆ。此系ハ
ゆゆ姫乃像ゝ作ゝゝゝ

ゆゑ。又そこてかの仏ふるむきしゐるそ。井もゐるしさんぐかつ
つりの中ゐるといふ像をまこふいつそ見る拍子べしと後ときく。

よとやま

今の俗ゴトによとやまちかくといふて。拍子集の中楽ゴトい
よもゐの人のゐるうきまるゐ弦外のうたへかゐるを。主ゐ家紋
物語花山をふこふいよの中に。とどさといふ拍子できて。よもやか
の人。上下やきのきまふうく。

ゆやゐる

あやかるといふ泡。拍子集新古今紫式部
をばあやゐるやきれ人のゐるゐ。

目録

目録のゐる。並び物語まい。花の色ふ物のくさかきゐるゐ。御
答ふいまて。ゐのうと。ゆゐる。

源氏物語

日書石蔵色記。まへ乃ちぐ。ゐかゐるハ俗ゴトいふ入し。

さがさ

俗ゴトふ物をさがりもとむること。さがるといふ。世間日物がゐ用ゐ
乃別のきゐりゐしゐ。

家ゆゐ

日ど物語本紙ちで。ゆきふ。

引出物

[illegible]物[illegible]馬を牽て贈物[illegible]北山
折大饗條[illegible]次尊者牽出物 馬二疋 若尊者好鷹者 馬一 鷹一聯 加大ヲ
[illegible]

相撲前二日の儀

同書、相撲先二日の儀の[illegible]次相撲人進出列立御
前大将随天氣仰云東向[illegible]次仰北向次仰[illegible]入礼
次相撲[illegible]今の[illegible]工俵入[illegible]
百弟遍

百弟遍乃念佛[illegible]相撲の[illegible]

家隆[illegible]
古今著聞集[illegible]壬生二品家隆の[illegible]男子[illegible]
[illegible]隆祐[illegible]加冠[illegible]名
[illegible]何[illegible]三序為俊[illegible]
田舎[illegible]
[illegible]隆の
[illegible]
[illegible]
形[illegible]為俊が父圖書允為弘[illegible]殿の
[illegible]汝[illegible]殿
[illegible]

此名のことをばかつらとして、とりまめくきてしへ、ゆゑあるべくとゝ惠び、ゝるとき、比奥のすがの郷きゝれて、人世世ゝまでもとゝ祈ん。

神をゐわざりふるひを原ゆのなるひをゐれしむす

ゆゑ人乃、神をなわざとふるひをゝ、ゝろうれるぞなり

ゝるハほどくふるとをゝ、ゝるふるしをゝ、ゝ免まどゝでよ乃

ゐるひ乃人ゐもくゐかつるでのゝふゝのをてゝゝ行まおてふんり

ちめてゝゝをゝてよつゝべきゝゝ沢ゝひゝれさへぎゝでゐろゝふぞゐ

ゐゝゝゝる、日ゐつゝゝ尺、祢、此天地ゐ物乃、生ゐ始めしも又なりく

今ゐ、ゆゑ中ゐ大きゝ小きゝゐゐくゐ事も、人乃ゐのゝへゝひゐき地居

ぞゝゝゐふゝゝゐゐくゐ事の原ゆぞゝふかゝら

ぞゝゝゝの形きゐ、ゝるゆゑより、をゝゝゝゐゝゝゝゐ人ゝぞまぞの

ひゝゝまゐゝゝふのゝゝまでゝゝゝ、ゝをゐゝをむきてゝゝゝゐゐゐ人ゝ

ゝゐゝゝゐゝゝゝゐ乃をゝゝゝゐゝゝて中ゝくゐ神代の原事ゝゝゝ人ゝ

てもゝくゝゝゝゝゝ世界ゐゐむゝゝゐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゐひゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

のうまてさのけうきんうりをもなくおうぎゆるかうを
ぶふうをばくたつでまうくしてうも。
はるまるる清代のさうしゆをまるく
作うをしゆうりうるうしをの部